

近年の日本における女性看護師・男性医師の結核感染・発病のリスクの検討

山内 祐子 永田 容子 小林 典子 森 亨

要旨：〔目的・対象〕結核登録者情報システムのデータベースを用いて、女性看護師、男性医師の結核罹患および潜在性結核感染症のリスクを一般人口と比較した。〔結果〕2010年の女性看護師の結核罹患率の相対危険度は20～69歳で4.86（95%信頼区間4.31-5.45）であり、1987～97年の2.30よりも上昇していた。相対危険度は20～29歳で8.84と最も高く、年齢とともに下がり50～59歳で3.60となるが、それでもなお有意に1よりは高い。男性医師では39歳以下の年齢でのみ有意に1より高かった。潜在性結核感染症（LTBI）で治療を指示される者の人口割合は明らかにこれら医療従事者で高く、相対危険度は女性看護師で20～69歳32.7（同30.5-35.0）で、20～29歳の62.8から60～69歳の11.6までの幅があった。男性医師では20～69歳で9.7（同7.9-11.7）、20～29歳の14.5から60～69歳5.3の幅があった。〔考察〕看護師や医師の結核患者は一般人口に比して積極的患者発見方法（定期健診や接触者健診）で発見されることが多く、これは現在医療職場における感染曝露対策への努力を示すものといえる。しかしながら、これらの医療従事者における発病やLTBIが多く、また看護師においてみられたようになお上昇している可能性があることから、その問題の動向のさらなる監視と職場における一般的な対策の強化がなおも必要である。

キーワード：結核，罹患率，相対危険度，医療従事者